

続・ウルトラマンの言語学

秋 月 高 太 郎*

The Language of Ultraman of the Next Generation

Kotaro Akizuki

ウルトラマンゼロは、過去のウルトラマンたちに比べて、より明確なキャラクター性が与えられたウルトラマンである。彼のことばづかいは、そのキャラクター性が反映したものになっている。ゼロのことばづかいは、終助詞「ぜ」、自称詞「おれ」、対称詞「おまえ」、強要形、断定「だ」文、長母音化、撥音便の使用といった特徴がある。これらは「ヤンキー」キャラクターによって使用される<ヤンキー語>の特徴でもある。<ヤンキー語>は、「女ことば」とみなされる表現の使用を徹底的に排除し、「男ことば」の特徴を備えた表現を過剰に使用することで成立する役割語の一種とみなすことができる。

キーワード：役割語、キャラクター、「ぜ」、終助詞、ヤンキー

1. はじめに

空想特撮シリーズ『ウルトラマン』のテレビ放送が開始されたのは昭和41年（1966年）のことである。『ウルトラマン』終了後、翌年には、『ウルトラセブン』の放送が開始される。以後、ウルトラシリーズは、幾度かの空白期間を挟みながらも、平成25年（2013年）の今日まで、約半世紀の間続いている¹⁾。その間、数多くのウルトラマンたちが入れ替わりに、またあるときは共演しながら登場してきた。彼らは、ウルトラ兄弟のように、同じ世界観を共有する仲間であったり、他のウルトラマンたちとは異なる、独自の世界の住人であったりする。彼らは、ウルトラマンという同一の名称を与えられていても、それぞれが異なったキャラクターとして造形されているのである。

秋月（2012a）では、昭和40年代に放送されたウルトラシリーズに登場するウルトラマンたちのことばづかいを、役割語の視点から分析した。昭和40年代初頭のシリーズ開始当初の作品群では、彼らは<神様>の役割語、すなわち<神様語>を話すキャラクターとして造形されていた。しかし、昭和40年代後半の作品群において、ウルトラ兄弟の概念が導入されるに伴い、彼らの話すことばは、<神様語>の特徴を失うことが明らかになった。日本の高度経済成長の終焉と共に、ウルトラマンは「神様」の座を降り、「人間」化したわけである。

本稿では、平成21年（2009年）公開の劇場作品に初登場したウルトラマンゼロ（以下、ゼロ）のことばづかひについて分析する。ゼロには、ウルトラセブン（以下、セブン）の息子という

2013年3月28日受理
* 尚綱学院大学 教授

設定が与えられており、彼が登場する作品群は、昭和 40 年代に放送されたウルトラシリーズと世界観を共有している。そのため、その作品群には、過去のシリーズに登場したウルトラマンたちも再登場し、ゼロと彼らに対話するシーンもある。しかし、そのような対話シーンにおけるゼロのことばづかいは、他のウルトラマンたちのそれとはかなり異なっている。これには、ゼロが、過去のどのウルトラマンとも異なったキャラクターとして造形されていることが関係していると考えられる。そこで本稿では、役割語の視点からゼロのことばづかいについて考察することで、そのキャラクターとことばづかいがどのように関係しているのかを明らかにする。

2. ゼロのことばづかいの特徴

2.1 ゼロのキャラクター

本章の目的はゼロのことばづかいに見られる言語学的特徴を明らかにすることだが、そこには、ゼロのキャラクターが深く関係していると考えられる。この意味で、ゼロのことばづかいを分析する上で、彼が登場する物語において、どのようなキャラクターとして造形されているかを理解しておくことが必要であろう。そこで、ことばづかいの分析に入る前に、ゼロが初登場する劇場公開作品『大怪獣バトルウルトラ銀河伝説 THE MOVIE』（以下、『伝説』）とその後のゼロ出演作品のあらすじを紹介しておく。

辺境の惑星で、ウルトラマンレオ（以下、レオ）によって激しい特訓を受ける一人の若いウルトラ戦士がいた。彼の名はウルトラマンゼロ。彼は、より強い力を求めて、光の国の禁忌であるプラズマスパークの力を手に入れようとしているところを、ウルトラ警備隊長であるゾフィーらに捕えられたのである。彼の父であるセブンは、彼を辺境の惑星に送り、レオの下で修行をさせていたのだ。そんなとき、プラズマスパークの力を手に入れた悪のウルトラマンベリアルによって、光の国は壊滅状態に陥り、ウルトラ戦士たちも倒されてしまう。父セブンと光の国の危機を知ったゼロは、修業先から舞い戻る。そして激闘の末、ゼロはベリアルを倒し、光の国は復活する。

『伝説』で初登場したゼロは、オリジナル DVD 作品『ウルトラ銀河伝説外伝ウルトラマンゼロ VS ダークロプスゼロ』（以下、『伝説外伝』）にも登場し、第 2 作目の劇場公開作品『ウルトラマンゼロ THE MOVIE 超決戦！ベリアル銀河帝国』（以下、『帝国』）では、別宇宙（アナザースペース）へ飛び出し、グレンファイヤー、ミラーナイト、ジャンボットという、共に戦う仲間を得る。さらに、オリジナル DVD 作品『ウルトラマンゼロ外伝キラークイーン』（以下、『ゼロ外伝』）では、ジャンナインが加わり、4 人はウルティメイトフォースゼロという集団を結成する。そして、現時点（2013 年 3 月）での最新作『ウルトラマンサーガ』（以下、『サーガ』）では、ゼロは再び別宇宙に飛び、ウルトラマンダイナ、ウルトラマンコスモスといった、過去に登場した別世界のウルトラマンたちとも共演している²⁾。

過去のウルトラシリーズと異なり、『伝説』以降のゼロが登場する作品群では、主な舞台が地球から光の国や別宇宙の惑星に移っている。それに伴い、物語の進行を担う主要キャラクターも、地球人（人間）ではなく、ゼロと同じ M78 星雲人のウルトラ戦士たちや別宇宙のヒーローたちになっている。たとえば、昭和 41 年放送の『ウルトラマン』においては、地球人である科学特捜隊のメンバーが主要キャラクターとして、それぞれのキャラクターが区別できるように明確に設定されていたのに対し、『伝説』以降の作品では、そのような「立った」キャラクター

性は、ゼロを含めた宇宙人たちの方に設定されている。この意味で、ゼロは、過去のウルトラマンたちと比べても、より明確なキャラクター性が与えられたウルトラマンだと言える。ゼロは、現時点（平成25年）では、ウルトラ戦士の中で最も若いウルトラマンとして設定されている³⁾。ゼロは、その若さゆえに、自身の力を過信し、しばしば（光の国にとって）反社会的な行動を行う。ゼロのそのような行動は、彼の父であるセブンらにとがめられ、「指導」されることになる。このようなゼロのキャラクター性は、人間で言うところの「不良少年」または「ヤンキー」キャラクターと重なることが多い⁴⁾。ゼロのことばづかいは、このようなキャラクター性を反映したものになっている。では、以下、ゼロのことばづかひの特徴について具体的に見ていくことにしよう。

2.2 終助詞「ぜ」

ゼロのことばづかひとして最も特徴的なのは、文末に、終助詞「ぜ」が付加されることである。以下の例を見られたい⁵⁾。

- (1) a. おれのビッグバンは、もう止められないぜ。(伝説外伝)
- b. 二万年早いぜ。(伝説外伝)
- c. ブラックホールが吹き荒れるぜ。(伝説外伝)

(1)の文はすべて、ゼロと敵の戦いが開始される、劇中のクライマックスシーンにおいて発せられたものであり、ゼロの決め台詞と呼べるものである⁶⁾。ゼロは、このような決め台詞以外にも、たびたび「ぜ」の付いた文の発話を行っており、「ぜ」の使用は、ゼロを代表することばづかひと言える。

「ぜ」は、過去のウルトラマンたちには、決して用いられることがなかったし、彼らは、ゼロと共演している今日の作品においても「ぜ」が付いた文を発することはない。ウルトラマンの歴史上、「ぜ」が付いた文を用いたウルトラマンは、ゼロが最初である。しかし、ウルトラマン以外のキャラクターに目を向けてみると、ゼロが登場する作品群には、ゼロ以外にも、「ぜ」が付いた文を用いるキャラクターが2人登場する。その一人は、ゼロの敵であるベリアルである。

- (2) a. ふっははは。帰ってきたぜ。(伝説)
- b. この街をぶっこわしてやるぜ。(伝説)

(2)は、宇宙牢獄に幽閉されていたベリアルが脱獄し、復しゅうのために光の国に戻ってきたときの発話である。「ぜ」を用いるもう一人のキャラクターは、『帝国』でゼロの仲間になる、別宇宙のヒーロー、グレンファイヤーである。

- (3) a. 仲間ってのはいいもんだよな。楽しかったぜ。(帝国)
- b. 焼き鳥に似て石頭だぜ。(ゼロ外伝)

(3 a) はゼロと和解した後での発話、(3 b) はジャンナインが仲間になった後での発話で

ある。ベリアルもグレンファイヤーも、ゼロほどではないが、「ぜ」が付いた文を使用するキャラクターである。ゼロ、ベリアル、グレンファイヤーという 3 人のキャラクターの共通点は、自分の力を過信し、その力で世界を支配したり、関係を築こうともくろむキャラクターとして造形されているという点である。ゼロがそのようなキャラクターであることはすでに述べた。ベリアルは、かつてはウルトラ戦士だったが、その強大な力を使って宇宙を征服しようとしたために、ウルトラマンキングによって捕えられ、投獄されたという過去をもつ。グレンファイヤーは、初対面のゼロに対して、いきなりけんかをふっかけるようなキャラクターである。一言で言うなら、この 3 人は「ヤンキー」気質を備えたキャラクターであり、「ぜ」は、そのようなキャラクターによって用いられる終助詞であると言うことができよう。

終助詞「ぜ」は、なぜ「ヤンキー」気質を備えたキャラクターによって用いられるのだろうか。これには、「ぜ」を使用することによってもたらされる表現効果が関係していると考えられる。これまで、「ぜ」には、以下のような表現効果があることが指摘されてきた。

- ①相手を軽蔑するような気持ちを表す⁷⁾。
- ②断定的に強調する⁸⁾。
- ③強い主張を表す⁹⁾。

(1) のようなゼロの決め台詞に用いられている「ぜ」は、「断定的に強調」または「強い主張」という表現効果が発揮されている例である。斎藤 (2012) は、「ヤンキー」の美学の中心にあるものを、「気合い」が入る、または「ツヨメ (強め)」ということばで表すことができると述べている。ゼロは、自らの意志や考えを「ぜ」が付いた文で発することによって、自らの気持ちを鼓舞したり、または相手に自分の強さをアピールするものとして、まさに「気合い」が入ったものとして表出しているのである。一方、ベリアルの発話である (2) に用いられている「ぜ」は、「相手を軽蔑するような気持ち」という表現効果が発揮されている例である。「なめんよ。」は「ヤンキー」の常套句としてよく知られているが、これは、「ヤンキー」気質には、相手にばかにされたくない、なめられたくないという意識があることを示している。ベリアルは、自身の行動を「ぜ」が付いた文を用いることによって、相手より優位に立とうとしているのである。このように、「ぜ」がもつ①～③のような表現効果は、「ヤンキー」気質と一致するものだと言える。ゆえに、「ぜ」は、ゼロを含めた「ヤンキー」気質を備えたキャラクターによって使用されるのだと考えられる。

ただし、ここで注意すべき点がある。それは、「ぜ」と「ニャ」のようなキャラ助詞との用いられ方の違いである。キャラ助詞は、あらゆる文の文末に付加することが可能であり、キャラ助詞「ニャ」は、その「猫」キャラクターが発話する文すべてに付加されていることが多い¹⁰⁾。一方、「ぜ」はそうではない。ゼロが「ぜ」が付いた文を発するのは、彼の全発話の一部にすぎない。ゼロのことばづかいが「ぜ」の使用によって特徴づけられていると言っても、それは、「猫」キャラクターが文末に「ニャ」が付いた文を使用することによって<猫>の発話キャラクターを繰り出すのとは異なっているのである。ある「猫」キャラクターが、ひとたび「ニャ」というキャラ助詞を用いた発話を行えば、そのキャラクターが発話する文にはすべて「ニャ」が付加されるという談話上の制約がかかる可能性が高い。そうすることによって、そのキャラクターに「猫」キャラクター性のようなものが保持されることになる。一方、あるキャラクター

が「ぜ」を用いた文を發したとしても、「ぜ」を付加できる文には發話内容や表現意図上の制限があり、そのキャラクターが發話する文すべてに「ぜ」を付加することはできない。「ぜ」のような終助詞は、使用可能な場合において使用するか、またはいっさい使用しないかによって、發話者のキャラクターを印象づけるものとして働いているのである。

2.3 自称詞「おれ」・対称詞「おまえ」

次に、ゼロが用いる人称代名詞を見てみよう。ここでは、ゼロ自身を指す自称詞と、相手を指す対称詞に注目する。まず、自称詞の例から見てみよう。

- (4) a. おれはゼロ、ウルトラマンゼロだ。(帝国)
- b. その野望、おれがたたきつぶす。(伝説)
- c. なめるなよ。おれはこの力を使いこなしてみせる。(伝説)

(4 a) は別宇宙でグレンファイヤーに初めて会ったときの發話、(4 b) はベリアルとの戦いのシーンでの發話、(4 c) はプラズマパークの力を手に入れようとしているところをセブンに止められたときの發話である。以上の例からわかるように、ゼロが用いる自称詞は、もっぱら「おれ」であり、場面や相手によって別の自称詞を使い分けることはない。ゼロは、自分の仲間との会話においても、自分と敵対する相手との会話においても、自分の父親との会話においても、常に「おれ」と称する。

過去にも、自称詞に「おれ」を用いるウルトラマンは存在した。秋月(2012a)で述べたように、昭和40年代初頭の「神様」キャラクターとしてのウルトラマンが用いる自称詞は「わたし」であったが、昭和40年代後半にウルトラ兄弟という概念が導入されて以降、年上のウルトラマンたちが「おれ」を用い、末っ子のウルトラマンが「ぼく」を用いるという使い分けが生じた。ここでは、「おれ」が、年上のウルトラマンが<兄>の發話キャラクターを繰り出すための自称詞として使われていた。すでに述べたように、ゼロは最年少のウルトラマンである。にもかかわらず、ゼロは「ぼく」を用いずに「おれ」を用いるのはなぜだろうか。

金水(2010)は、昭和40年代中頃のマンガ・アニメ作品において、「巨人の星」の星飛雄馬や「あしたのジョー」の矢吹丈が「おれ」を用いるのに対し、「ドラえもん」ののび太が「ぼく」を用いることをあげ、次のように述べている。

「おれ」が男らしいヒーローの代名詞となると、相対的に「ぼく」は弱々しく、幼稚な印象を与えるように変質してきた。(p.47)

昭和40年代後半のウルトラシリーズにおいて、末っ子のウルトラマンは、兄のウルトラマンたちに助けられ、守られるキャラクターであった。彼は、しばしば、兄たちの力を借りなければ、怪獣や宇宙人を倒すことができなかつたからである。そんな彼が、兄たちの前で用いる自称詞は「ぼく」がふさわしいと言えよう。一方、ゼロは「ヤンキー」キャラクターである。そんなゼロが用いる自称詞に「ぼく」がふさわしくないことは明らかである。したがって、過去のウルトラマンが用いた「おれ」とゼロが用いる「おれ」には、用いる動機に異なりがあると言わねばならない。過去のウルトラマンたちが、末っ子のウルトラマンに対して、<兄>の

発話キャラクターを繰り出すために「おれ」を用いたのに対し、ゼロは〈ヤンキー〉の発話キャラクターを繰り出すために「おれ」を用いているのである。

次にゼロが用いる対称詞を見てみよう。ゼロは対称詞として、「おまえ」をよく用いる。以下の例を見られたい。

- (5) a. おまえは、自分の生みの親を、天球内の生命体を滅ぼしたと言うのか。(ゼロ外伝)
 b. バカ言うな。正義のために戦った勇者の姿だ。おまえは立派なやつだぜ。(帝国)
 c. へっ、子どもを助けたおまえの勇氣。感動したぜ。(サーガ)

(5 a) は敵であるビートスターを、(5 b) は仲間であるミラーナイトを、(5 c) は同化した地球人タイガ・ノゾムを、それぞれ「おまえ」と称している。これらの例から、ゼロが相手によって対称詞を使い分けることはなく、どんな相手に対しても「おまえ」を用いることがわかる。ただし、特定の場面においては、「おまえ」以外の対称詞を用いることがある。以下の例を見られたい。

- (6) a. なんだ、てめえは。(帝国)
 b. きさまだけは絶対に許さん。(伝説)
 c. きさま、これはずせ。(伝説)

(6 a) では、ビートスターに操られたジャンナインと初めて対面したときに、ジャンナインを「てめえ」と称している。(6 b) では父であるセブンを倒したベリアルに対して、(6 c) では修行のためにテクターギア（拘束具）を身につけさせたレオに対して、それぞれ「きさま」と称している。これらは、相手を威圧する意図があったり、怒りで感情が高ぶっている場面での発話であり、例外的な使用と考えられる。したがって、ゼロがデフォルトで用いる対称詞は「おまえ」とみなしていいだろう。

過去のウルトラマンも対称詞に「おまえ」を用いることがあった。「神様」キャラクターのウルトラマンは、人間に話しかけるときに対称詞に、「きみ」以外にも「おまえ」を用いているし、ウルトラ兄弟間の会話において、年上のウルトラマンたちは末っ子のウルトラマンを「おまえ」と称することがあった。しかし逆に、末っ子のウルトラマンは、兄のウルトラマンたちを「兄さん」または「セブン兄さん」のように称しており、「おまえ」で称することは決してなかった。つまり、年上のウルトラマンが「おまえ」を用いて末っ子のウルトラマンを称するのは〈兄〉の発話キャラクターを繰り出すためであり、末っ子のウルトラマンが兄のウルトラマンたちを「おまえ」で称することはありえなかったのである。一方、(5) の例が示すように、ゼロは、自分と同等、または自分より上位と想定される相手に対してさえも「おまえ」と称するのが普通である。なぜだろうか。

一般に「おまえ」は、自分が相手より上位、または力を有しているとみなした話し手によって用いられる対称詞である。したがって、話し手が「おまえ」を用いて相手を称することは、相手に対してなんらかの力を有していることを表明することになる。ゼロがどんな相手に対しても「おまえ」を用いるのは、相手に見下されたくないという気持ちの現れと考えることがで

きる。ゼロは、過去の末っ子ウルトラマンのように「兄さん」のような対称詞を使って、親しさやへりくだりの気持ちを伝えることはしない¹¹⁾。「ヤンキー」キャラクターのゼロはそれを許さない。ゆえに、ゼロはだれにでも「おまえ」と呼びかけるのである。

2.4 強要形

次に、ゼロが、相手に対して、命令や禁止を要請するときに用いる表現について見てみよう。以下の例を見られたい。

- (7) a. タイガ、これを装着しておれになれ。(サーガ)
- b. あぶねえだろ。あっちいってな。(伝説)
- c. ばか言うな。(帝国)

(7 a) は、同化した地球人タイガの心の中で、ウルトラゼロアイを使ってゼロに変身するように要求している発話である。(7 b) は、レオとの修行中、その戦いに巻き込まれそうになった小怪獣ピグモンに対しての発話である。(7 c) は、ベリアルによって闇に魂を侵され、自暴自棄になったミラーナイトに対しての発話である。(7 a) では動詞の命令形、(7 b) では動詞のテ形に命令を表す終助詞「な」の付いた形、(7 c) では終止形に禁止を表す終助詞「な」の付いた形が用いられている。これらの形を用いた発話には、相手に対して、行為の実行や抑止を強く要請する含みがある。そこで、これらの形をまとめて、「強要形」と呼ぶことにしよう。

強要形は、実際の会話においては、使用者や使用の場面がかなり限られている。第一に、強要形は、女性の話し手には用いにくい形である。女性の話し手は、聞き手に行為の実行や抑止を伝えるときには、以下の(8)のような形式を用いることの方が普通であろう。

- (8) a. あっちに行つて。
- b. あっちに行つたら／行つてみたら。
- c. そっちに行かないで。

(8 a) は動詞のテ形、(8 b) は仮定を表すテ形、(8 c) は「ない」を用いた動詞の否定形に接続助詞の「て」が続いた形である。これらの形はすべて、いわゆる中止形であり、後に、それぞれ「ください」「いいと思う」「ほしい」等の表現が続くことが予想され、聞き手に選択の余地を与える含みをもった表現になっている。鈴木(1997)は、「聞き手に選択の余地を残さない<行為要求型の発話>は、『女性語』として不適切になる」と述べている。

第二に、強要形の使用は、男性の話し手であっても、緊急性が高い場面で、相手に強く指示をするような場合に限られる傾向がある。たとえば、「早く逃げろ」や「危ないから近づくな」といった発話は、火事の現場で危険を知らせるような場面や、親が幼い子どもに注意しているような場面で用いられることがある。つまり、強要形の使用は、話し手が聞き手に対して絶対的な力をもつような場合にのみ適切となるのである。

過去のウルトラマンが強要形を用いるのは、まさにこのような場面においてであった。兄のウルトラマンたちは、末っ子のウルトラマンに対して、強要形で行為の実行を指示していた¹²⁾。兄のウルトラマンたちは、末っ子のウルトラマンに対して絶対的な力をもつ存在であったから

だ。彼らの強要形の使用は、〈兄〉の発話キャラクタを繰り出すためという動機付けがあった。一方、現時点で最も若いウルトラマンであるゼロには、劇中で、彼が地位的に上位となるような相手は登場しない。ゼロは最も下っ端のウルトラマンである。そんなゼロが強要形を用いるのはなぜだろうか。そこにはやはり、ゼロの「ヤンキー」キャラクターが関係していると考えられる。ゼロが相手に行為の実行や抑止を指示するとき、(8)のような、相手に選択の余地を与える含みをもった形を選択することはありえない。相手に選択の余地を与えることは、自らが自分の力が相手より下であることを認めることになり、それは、彼の「ヤンキー」キャラクターと一致しないからだ。ゼロがそのキャラクターを保持するためには、常に強要形を用いることが求められる。これが、ゼロがどんな場面でも、どんな相手に対しても、強要形を用いて命令や禁止を行う理由である。

2.5 断定「だ」文

ゼロは、「だ」で終る文をしばしば用いる。以下の例を見られたい。

- (9) a. このくらい当然だ。(サーガ)
 b. これがおれたちの光だ。(ゼロ伝説)
 c. なんてお前みたいな男と合体しちまったんだ。(サーガ)

(9 a) と (9 c) は、同化したタイガの心の中でタイガ自身に話しかけているときの発話、(9 b) は、ベリアルとの戦いの最中での叫びの発話である。(9 a) は形容動詞文、(9 b) は名詞述語文、(9 c) はいわゆるノダ文であるが、これらの文は最後が「だ」で終わっているところは共通している。これらを、断定「だ」文と呼ぶことにしよう。

一般に、断定「だ」文は、話し手自身の意志や考えを強く主張する含みをもつ。2.4 で述べた強要形と同様に、断定「だ」文も、女性の話し手には使いにくいとされる。その代わりに、女性の話し手は以下のような形を用いることが多い。

- (10) a. すごくきれい。
 b. (雨が降ってきたときに) あ、雨。
 c. なくしちゃったの。

(10a) では形容動詞の終止形語尾「だ」が、(10b) では断定の助動詞「だ」が、(10c) では「のだ」の「だ」が、それぞれ脱落している。「だ」が脱落した文は、それが女性の話し手によって発話されたものであるという印象を強くする¹³⁾。

実は、断定「だ」文を用いるのは、ゼロだけではない。過去のウルトラマンたちも断定「だ」文を用いていた。ウルトラマンたちが「男」のキャラクターとして設定されている限りにおいて、これは驚くべきことではないだろう。しかし、ゼロの仲間には、断定「だ」文を用いないキャラクターも存在する。それはミラーナイトである。彼の発話を以下に示そう。

- (11) a. 身だしなみは大事ですよ。(ゼロ外伝)
 b. われわれのようにたとえ違う者同士でも、心があれば理解し合えます。(ゼ

口外伝)

- c. 川の流れをさかのぼるのです。(帝国)

(11a) はグレンファイヤーに鏡ばかり見ていると言われたときの発話、(11b) は仲間という概念を理解できなかったジャンナインに対しての発話、(11c) はゼロにバラージの楯のありかを知らせるときの発話である。(11a) では丁寧の助動詞「です」に終助詞「よ」が続いた形、(11c) では丁寧の助動詞「ます」、(11c) では「のだ」の丁寧な形である「のです」が用いられている。これらの発話からわかるように、ミラーナイトは、「です・ます」を用いた丁寧体での発話がデフォルトのキャラクターである。彼は、仲間であるゼロやグレンファイヤーに対しても、一貫して丁寧体で話す。ミラーナイトはいわゆる「紳士」キャラクターであり、彼のことばづかいは、<紳士>の発話キャラクターを繰り出すためのものになっていなければならない。それが、丁寧体の使用と断定「だ」文の回避であると考えられる。このように、断定「だ」文の使用は、「ヤンキー」キャラクターであるゼロに特有のことばづかいはないが、「紳士」キャラクターのミラーナイトと対比したときにきわだつことばづかいの1つとして理解できる。

2.6 長母音化・撥音便

最後に、音声面でのゼロのことばづかいの特徴をみてみよう。以下の例を見られたい。

- (12) a. へへっ。けっこうやるじゃねーか。(伝説外伝)
b. やっと本気か。おせーんだよ。(伝説外伝)

(12a) は敵であるダークロプスゼロと初めて戦った後での発話、(12b) はその敵と二度目の戦いのときの発話である。(12a) では助動詞「ない」が「ねー」に、(12b) では形容詞「おそい」が「おせー」に、それぞれ変化している。(12) は、接続母音の /ai/ や /oi/ が長母音の /e:/ に変化しており、一種の長母音化が起こっている例である。さらに、以下の例も見られたい。

- (13) a. じゃますんな。(伝説)
b. 今度こそぶっとばしてやんぜ。(伝説)
c. おまえら仲間んなれ。(帝国)

(13a) はレオとの修行中、その戦いに巻き込まれそうになった小怪獣ピグモンに対しての発話、(13b) はその直後のレオに対する発話、(13c) はベリアルを倒した後でミラーナイトやグレンファイヤーに向けての発話である。(13a) では「する」が「すん」に、(13b) では「やる」が「やん」に、(13c) では助詞「に」が「ん」に、それぞれ変化している。(13) は、/ru/ や /ni/ が特定の環境で撥音 /n/ に変化するという、一種の撥音便が起こっている例である。

このような音変化を伴った発話は、ゼロ以外にも、仲間であるグレンファイヤーの発話にも見られる。

- (14) a. バラージの楯はな、封印を解くかけらがなきや意味がねー。(帝国)

b. てめー、あんときの焼き鳥だな。(帝国)

(14a) はバラージの楯を探しているゼロたちに対しての発話、(14b) はジャンボットと再会したときの発話である。(14a) では「ない」が「ねー」に変化する長母音化が、(14b) では「あの」が「あん」に変化する撥音便が起こっている。前出のミラーナイトが「紳士」キャラクターであるのに対し、グレンファイヤーは、いわゆる「ワイルドな」キャラクターである。この点において、グレンファイヤーのキャラクターは、ゼロのそれと重なるところがある。ミラーナイトの発話には、このような音変化は決して起こらないことから、(12)～(14) のような発話は、ゼロやグレンファイヤーの「ワイルドな」キャラクター性を強調するために用いられていることばづかいと言えよう。金水 (2010) は、(12) のような長母音化が起こっている例について、次のように述べている。

「すげえ」「うるせえ」「知らねえよ」「わりい (悪)」のような母音の訛りは、男性、それもどちらかという中流以下の男性のカジュアルな話し方ととらえられやすい。(p.37)

(13) のような撥音便が起こっている例も、同様の印象を与えることばづかいとみなすことができよう。ただし、長母音化や撥音便は、すべての同様な環境で生じるわけではない。同じ発話者であっても、そのような音変化が生じていない発話をすることもある。以下の例を見られたい。

(15) おかげでイービスの力はしばらく使えないな。(帝国)

(15) は、別宇宙に飛んだゼロが力を失っていることに気づいたときの独話である。この発話においては、「ない」が「ねー」に変化するという長母音化が起こっていない。長母音化や撥音便は、発話者が、特に<ヤンキー>の発話キャラクタを繰り出したときに、発話の中でフレーバー的に使用されると考えられる。

3. ゼロのことばづかいと<ヤンキー語>

第2章ではゼロのことばづかいの特徴を具体的に見た。まとめると以下のようなようになる。

- ①終助詞「ぜ」
- ②自称詞「おれ」・対称詞「おまえ」
- ③強要形 (動詞の命令形・動詞の終止形+禁止「な」)
- ④断定「だ」文
- ⑤長母音化・撥音便

ゼロのことばづかいは、以上のような言語学的な特徴をもった語彙・表現形式・音形の総体としてとらえることができる¹⁴⁾。約半世紀に渡るウルトラマンの歴史において、このような

ことばづかいをするウルトラマンは、ゼロが最初である。しかし、日本のマンガやアニメ作品には、同様のことばづかいをするキャラクターは、すでに多く登場している。いわゆる「ヤンキー」キャラクターである。以下に、「ヤンキー」マンガに登場する「ヤンキー」キャラクターの発話例を示そう¹⁵⁾。

- (16) a. 行くぜ！ ヒロシ
b. けど…ひろ子のためなら…俺は…！
c. あのブスはお前にやるぞ ヒロシ
d. やれるもんならやってみろ…！
e. 俺だってそうだ…！
f. ヤリ方がキタネエぜ！
g. へたにかかわってんとお前らもまきぞえくうぜ…
- (17) a. 早く行こうぜ
b. 金なら俺が貸してやろうか？
c. おめーに指図される覚えはねえ
d. もしやり合うような事があれば人目につくところは避ける
e. 止めなきやなんねえんだ
f. 俺はこいつと…勝負つけてえだけなんだよ！！
g. どう見てもこっちが悪いと思ったから素直に頭下げてんじゃねえか

(16) は『BE-BOP-HIGHSCHOOL』の中村トオルの発話、(17) は『ろくでなしBLUES』の前田太尊の発話である。それぞれ、(a) 終助詞「ぜ」、(b) 自称詞「おれ」、(c) 対称詞「おまえ」、(d) 動詞の命令形、(e) 断定「だ」文、(f) 長母音化、(g) 撥音便の例である。このようなことばづかいを<ヤンキー語>、そして<ヤンキー語>によって繰り出される発話キャラクターを<ヤンキー>キャラクターと呼ぼう。ゼロのことばづかいは、まさに<ヤンキー語>に他ならない。

ここで、役割語としての<ヤンキー語>と、実際に「ヤンキー」や不良少年と呼ばれる人々のことばづかいとの関係について少し述べておこう。<ヤンキー語>は、役割語である限りにおいて、実在する「ヤンキー」と呼ばれる人々のことばづかいとまったく同じではない。役割語としての<老人語>や<博士語>が、実際の老人や博士のことばづかいとは異なっているように、<ヤンキー語>と現実の「ヤンキー」のことばづかいの間には異なりがある。しかし、<ヤンキー語>は現実のことばづかいの裏付けをもった役割語である。(16) や (17) のような「ヤンキー」キャラクターのセリフは、まったく同じではないにしろ、十分、現実の「ヤンキー」と呼ばれる人々が口にしそうなものである。おそらく<ヤンキー語>は、現実の「ヤンキー」のことばづかいの中から取り入れられたり、逆に、現実の「ヤンキー」が、マンガ作品やテレビドラマ等に登場する「ヤンキー」キャラクターのセリフを模倣して用いたり、または「ヤンキー」でない人々が、日常会話や Twitter の発言等で、演出効果として<ヤンキー>キャラクターを繰り出すために用いたりすることによって成立したものであろう。

また、<ヤンキー語>は、いわゆる「男ことば」の下位分類の1つとみなすことができる。

＜ヤンキー語＞の特徴である①～⑤はすべて、「男ことば」の特徴でもある。「男ことば」は、これらの特徴のいくつかをかいつまんで、または場面によってフレーバー的に使用することで成立していることばづかいである。実際の「男ことば」には、いわゆる「女ことば」とみなされるようなことばづかいも部分的に含まれるのが普通である¹⁶⁾。この意味で、＜ヤンキー語＞とは、「女ことば」の使用を徹底的に排除し、「男ことば」の特徴を過剰に満たすことで成立することばづかいとみなすことができる¹⁷⁾。

4. おわりに

本稿では、ウルトラマンゼロのことばづかいの特徴について、役割語の視点から分析した。ウルトラマンゼロのことばは＜ヤンキー語＞であり、それは、従来の日本のマンガやアニメ作品等に登場してきた「ヤンキー」キャラクターのことばづかいと一致することがわかった。しかし、＜ヤンキー語＞については、いくつか未解決の問題も残されている。第一に、＜ヤンキー語＞の起源に関しては未だ不明な点が多い。金水（2008）は、役割語としての＜老人語＞の起源を、18世紀後半から19世紀にかけての江戸の言語状況に求めているが、＜ヤンキー語＞についても、同様の起源探求が行われる必要がある¹⁸⁾。第二に、現実の「ヤンキー」と呼ばれる人々のことばづかいと、役割語としての＜ヤンキー語＞との関係も明らかではない。＜ヤンキー語＞は、ツンデレ表現のような、バーチャルな世界にだけ存在することばづかいではなく、現実世界で実際に用いられていることばづかいと関係がある¹⁹⁾。この意味で、＜ヤンキー語＞には、西田（2012）がいうところの「常用性」があると考えられる。これらの問題については今後の課題としたい。

注)

- 1) ここで言うウルトラシリーズには、日本における（地上波）テレビ放送という形態に限らず、オリジナルビデオ・DVD作品として発売されたものや劇場公開作品等を含めている。
- 2) 『帝国』以降の作品では、マルチスペース（多元宇宙）の概念が導入され、異なった世界観をもったウルトラマンやヒーローが共演することが可能になっている。
- 3) 円谷プロの公式設定によれば、ウルトラマンが2万歳、セブンは1万7千歳、レオが1万歳なのに対し、ゼロは5900歳である。
- 4) 「ヤンキー」については、五十嵐（2009）や齋藤（2012）を参照されたい。
- 5) 秋月（2012a）と同様に、ゼロの発話データは、ゼロがウルトラマンの姿で発話しているものだけに限り、彼が人間に乗り移って、ウルトラマン以外の姿になっているときの発話は除いた。ゼロは、『帝国』では別宇宙の惑星アヌーの青年ランと、『サーガ』では別宇宙の地球の青年タイガ・ノゾムと同化している。ただし、『サーガ』においては、タイガとゼロは、身体は同化しているが、意識は独立したものとして描かれており、しばしば二人が（心の中で）対話するシーンが登場する。このようなシーンにおけるゼロの発話はデータに含めてある。
- 6) (1 b) の「二万年早いぜ。」というセリフは、『伝説外伝』だけでなく、『サーガ』でも用いられており、ゼロの常套句になりつつある。
- 7) 『新潮現代国語辞典第1版』（1985）の記述に基づく。
- 8) 『現代例解国語辞典第1版』（1985）の記述に基づく。
- 9) 益岡・田窪（1994）の記述に基づく。
- 10) キャラ助詞「ニャ」等については、秋月（2012b）を参照されたい。
- 11) 調査した作品中では、ゼロが年上のウルトラマンを呼称で称する場面は発見できなかった。作品中では、

ゼロが彼らを呼称で称すること自体が避けられている印象がある。ただし、セブンだけは「おやじ」と称している。ウィキペディア（2013年3月18日閲覧）には、舞台劇『ウルトラマンプレミア2011』で、レオを「レオ教官」、ゾフィーを「ゾフィー隊長」と呼んでいるという記述がある。ただし、『ウルトラマンプレミア2011』は、劇場で行われている舞台劇であり、劇場公開作品やDVD作品とは、演じる俳優にも異なりがある。本稿では、このような舞台劇のセリフは考察の対象にしていない。

- 12) 『ウルトラマンA』第13話において、ヤプールによってウルトラ兄弟がゴルゴダ星におびき出された場面で、地球のピンチを知ったウルトラマンが、エースに「エース、早く行け。」と命じている。
- 13) 男性の話し手が(10)のような文を発話した場合には、彼(女?)が<おねえ>の発話キャラクタ(または、<おかま>の発話キャラクタ)を繰り返しているときみなされるだろう。
- 14) これ以外のゼロのこぼれかきの特徴として、「フッ」または「ヘッ」という笑い声をあげることができるが、本稿では、笑い声のような超分節の特徴については考察の対象外とした。
- 15) 森田(2009)は、ヤンキー・マンガに共通する特徴を、次のように述べている。
高校三年間(もしくは中学までを含めた六年間)を、子供のままでいられる最後の季節と前提したうえで、しかし明確な目的意識を持たず、ある程度の我が儘を自分に許しながら行動するがゆえに、トラブルを引き起こし、トラブルに巻き込まれてしまう男の子を描いているのである。
- 16) 遠藤(2002)は、有職の20代~50代の男性から採取した談話データには、「あら」「のよ」「わ」といった、「女性ことば」とみなされてきた表現形式の使用があることを指摘している。
- 17) <ヤンキー語>は、男性のキャラクターによってのみ用いられるわけではない。マンガ作品等に登場する、いわゆる「不良少女」または「女ヤンキー」のキャラクターは<ヤンキー語>を話す。以下は、『花のあすか組!』に登場する九楽あすかのセリフである。
(i) あたしも毎日いい子にしてるんだぜ
(ii) 友達い? ンなモンいねえよ
(i) では終助詞「ぜ」が使用され、(ii) では撥音便と長母音化が生じている。ただし、(i) に見られるように、自称詞は「あたし」を使用している。「ヤンキー」においては、発話者のジェンダー属性に基いた「男ことば」と「女ことば」の差は極小化されると考えられる。
- 18) 終助詞「ぜ」が、いつごろから用いられているのかについては不明な点が多い。たとえば、式亭三馬の『浮世風呂』には、江戸町人の下層の男性が「ぜ」を用いている例が散見できる。以下は、「前編 男湯の巻」の「朝湯の光景」における、豚七と若い男の発話である。
(i) あひやねなべやぼだぜ。
(ii) コウ、おめえの病気もこまつたもんだぜ。
このような用例の存在は、18世紀末から19世紀初期において、特に下層の江戸町人によって、終助詞「ぜ」が用いられていたことを示している。ただし、この「ぜ」が、本稿で扱った終助詞「ぜ」と同じ用法をもつものとみなせるかどうかは明らかでない。
- 19) 終助詞「ぜ」が、今日、現実の日常会話で、どの程度使用されているかも明らかでない。遠藤(2002)は、注16)で示した談話データには、「ぜ」の使用が1例もないことを報告している。ただし、このデータの発話者は、社会的地位が比較的高い男性が多く、このような発話者の属性が影響している可能性が高い。

資料

- DVD『大怪獣バトルウルトラ銀河伝説 THE MOVIE』バンダイビジュアル株式会社
DVD『ウルトラ銀河伝説外伝ウルトラマンゼロ VS ダークロブスゼロ STAGE I 衝突する宇宙』バンダイビジュアル株式会社
DVD『ウルトラ銀河伝説外伝ウルトラマンゼロ VS ダークロブスゼロ STAGE II ゼロの決死圏』バンダイビジュアル株式会社
DVD『ウルトラマンゼロ THE MOVIE 超決戦!ベリアル銀河帝国』バンダイビジュアル株式会社
DVD『ウルトラマンゼロ外伝キラークイーン STAGE I 鋼鉄の宇宙』バンダイビジュアル株式会社
DVD『ウルトラマンゼロ外伝キラークイーン STAGE II 流星の誓い』バンダイビジュアル株式会社
DVD『ウルトラマンサーガ』バンダイビジュアル株式会社
きうちかずひろ『BE-BOP-HIGHSCHOOL ①』講談社
高口里純『花のあすか組! ①』角川書店
円谷プロダクション(監修)『円谷プロ全怪獣図鑑』小学館

中村通夫（校注）『日本古典文学大系 63 浮世風呂』岩波書店
 ブレインナビ（編著）『ウルトラマンは時代を映す鏡だ！』PHP 研究所
 森田まさのり『ろくでなし BLUES ①』集英社

参考文献

- 秋月高太郎（2012a）「ウルトラマンの言語学」『尚綱学院大学紀要』第 63 号 p.17-30
 秋月高太郎（2012b）「動物キャラクターの言語学」『尚綱学院大学紀要』第 64 号 p.43-57
 五十嵐太郎（編著）（2009）『ヤンキー文化論序説』河出書房新社
 遠藤織枝（2002）「男性のことばの文末」現代日本語研究会（編）『男性のことば・職場編』ひつじ書房
 金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店
 金水敏（編）（2007）『役割語研究の地平』くろしお出版
 金水敏（2008）「役割語と日本語史」金水敏・乾喜彦・渋谷勝己『日本語史のインターフェイス』岩波書店
 金水敏（2010）「「男ことば」の歴史－「おれ」「ほく」を中心に」中村桃子（編）『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社
 金水敏（編）（2011）『役割語研究の展開』くろしお出版
 斎藤環（2012）『世界が土曜の夜の夢なら ヤンキーと精神分析』角川書店
 定延利之（2006）「ことばと発話キャラクタ」『文学』7-6, p.126-133
 定延利之（2007）「キャラ助詞が現れる環境」金水敏（編）『役割語研究の地平』くろしお出版
 定延利之（2011）『日本語社会のぞきキャラくり－顔つき・カラダつき・ことばつき』三省堂
 鈴木千寿（2001）「女の使う「男のことば」、男の使う「女のことば」」遠藤織枝（編）『女とことば－女は変わったか 日本語は変わったか』明石書店
 鈴木陸（1997）「女性語の本質－丁寧さ、発話行為の視点から－」井出祥子（編）『女性語の世界』明治書院
 西田隆政（2009）「ツンデレ表現の待遇性－接続助詞カラによる「言いさし」の表現を中心に－」『甲南女子大学研究紀要文化・文学編』第 45 号 p.15-23
 西田隆政（2010）「「属性表現」をめぐって－ツンデレ表現と役割語の相違点を中心に－」『甲南女子大学研究紀要文化・文学編』第 46 号 p.1-11
 西田隆政（2012）「「ボク少女」の言語表現－常用性のある「属性表現」役割語の視点」『甲南女子大学研究紀要文化・文学編』第 48 号 p.13-22
 福島直恭（2002）『<あぶない ai>が<あぶねえ e:>にかわる時－日本語の変化の過程と定着』笠間書院
 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
 益岡隆志・田窪行則（1994）『基礎日本語文法－改訂版－』くろしお出版
 森田真功（2009）「ヤンキー・マンガダイジェスト」五十嵐太郎（編著）『ヤンキー文化論序説』河出書房新社